

真の「ボランティア精神」の育成は、どこで？ 誰が？

階段、段差が気になるので外出時は杖を使用している。先日、混む地下鉄に乗った折、立たなくても少し体をずらすだけで十分と思い、少し両側、更に隙間を空けて座る高校生か、それとも卒業して間もなしかの座っているカップルの前に進んだ。

その時、ふと友人の「主人は骨折して松葉杖をついての通勤でも席を譲って貰えなかったこともあったとか」のメールと、先日読んだ「障害者の経済学」の「高齢者、障害者に前に立たれた時、当人は席を譲るべきかどうかで心の中で葛藤が生じ、心理的負担を感じているはず」の記述が頭をよぎり、このカップルはどう行動するかなを試して見たくなくて「少しずれて席を空けてくださいますか」とは、あえて云わなかった。

二人は、私を見て、高齢者か障害者かなと思ったはず。

まして、「お互いに席を詰めて一人でも多く座れますように、和やかな車内に…」の趣旨の車内放送があってもそのまま。

このカップルに遭遇し、やはりボランティア精神は育っていないなあつくづく実感した。

今の時代、高校まではどこかでボランティア活動については話されているはず。

各学校でボランティア活動を勧めてもボランティア精神が育ってはいない、と私は常々思っている。

恐らく、指導する教師が、ボランティア精神とは何かも解っていないだけに、殆どの生徒たちは、ボランティア活動とは当事者や施設等から頼まれて、決まった場所で決まった時間にするものと、勘違いしたままでないかと、私は思っている。

そこで、私は、ボランティア精神について、あえて科目名に拘わらず授業時間を割いて語りかけている。

その授業後の感想文に「ボランティア活動には、自己形成という、そんな深い意味があるとは知らなかった。」との記述が結構多い。

ボランティア精神とは、云い換えれば「思い遣りの心の実践」だけに、そう難しいことではなく、これが育てば、世の中もっとみんなが日常的に助け合えるはずと思っている。

私はわずか14分の短い車中なので立っていることはそう負担でないだけに、「こんな、席を詰めることさえできない優しさのない彼（彼女）なら、別れた方がいいよ！」と云いかねない、お節介焼きで厚かましい自分を抑える方が大変だった(ˆoˆ)

それにしても、良しにつけ悪しきにつけ、何でも「福祉を考える」材料にしちゃう自分にも呆れてる(ˆoˆ)

(2006年5月25日 記)